



～二宮尊徳と下高田村・大山太助のかかわり～

関文化課（本庁3階） ☎ 22 - 0183

二宮尊徳（1787年～1856年）

は、小田原藩栢山村（現在の神奈川県小田原市）に生まれ、江戸時代後期の天明・天保の大飢饉で疲弊した数多くの藩や村を、実践主義により復興させた農政家です。本市でも、下館藩の財政再建や、各地の農村復興に尽力しました。

江戸幕府の官僚である旗本・中西 沓岐守の領地だった下高田村（筑西市下高田）も、尊徳による農村復興事業が行われた場所の一つです。

天保元年（1829年）下高田村の太助は、一家と村の困窮民救済を尊徳に願い出て、天保4年に農村復興事業が始まりました。

下高田村の農村復興事業は、太助が中心となり、桜町陣屋（当時、尊徳が赴任していた役所）から資金を借用。その資金を使って荒れ地の開発や道・橋・用水路といったインフラ工事と村民の借金返済、鍬や鎌といった農機具の購入、困窮民への生活費補助など、村民の生活を立て直し、農業ができるように補助しました。

農村復興事業の中心となったので、

太助は、一般の百姓から組頭、村の代表者である名主を経て、天保10年（1839年）に下高田村ほか5か村の財政などを取りまとめる代官という役職につきました。そして、苗字帯刀（百姓が特別に武士のように苗字を名乗ったり、刀を持つこと）を許され、

大山太助と名乗りました。

太助は、下高田村の農村復興事業だけでなく、尊徳一番の弟子ともいわれる富田高慶の「尊徳の門人になりたい」という志望を実現するためにも尽力しました。門人となった高慶は、『報徳記』という、尊徳の教えを網羅したとても有名な本を書いています。

また太助は、尊徳とともに富士山信仰の「不二講」という組織に所属し、報徳思想につながる学問に取り組み、短歌を詠むといった文化的な活動をしていました。

こうして下高田村は、尊徳やその門人と深いつながりをもつ大山太助の尽力によって、報徳仕法を行うことができました。

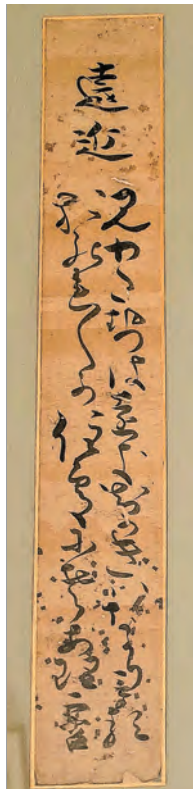


「二宮尊徳和歌」

「遠近

見わたせは遠きちかきはなかりける
おのれおのれか住處にそあり 二宮

金箔銀箔がちりばめられた短冊に和歌が詠まれています。不二講の活動で、二宮尊徳が詠んだ和歌と考えられます。



「報徳」印

農村復興事業の具体的な事柄を決める時に、大山太助が押したと考えられる。

第25回全国報徳サミット筑西市大会

- ▶ テーマ：「報徳仕法に学ぶ 心豊かでたくましく生きるひとづくり・まちづくり」
- ▶ 日 時：11月9日（土）午前9時開場
午前9時30分開演
- ▶ 会 場：明野公民館イル・ブリランテ
- ▶ 内 容：報徳学習発表（五所小学校）、基調講演、パネルディスカッション、大会宣言決議など
- ▶ 参加費：無料